

立命館大学大学院 応用人間科学研究科 [修士課程]

*Ritsumeikan University
Graduate School of
Science for Human Services*

Guide 2017

「対人援助実践学」の
創造を目指す



立命館大学大学院 応用人間科学研究科

Ritsumeikan University Graduate School of Science for Human Services

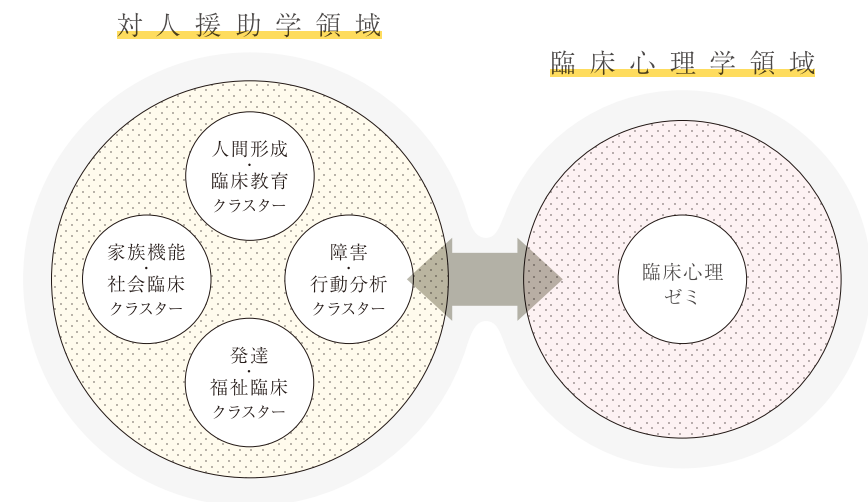
HP <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/index.html>

お問い合わせ

立命館大学衣笠独立研究科事務室 〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 創思館1階 Tel: 075-465-8375（月～金） E-mail: doku-ken@st.ritsumei.ac.jp

応用人間科学研究科長 徳田 完二

応用人間科学研究科
Graduate School of Science for Human Services



本研究科は「臨床心理学領域」と「対人援助学領域」の2つの領域を開設しています。各々の領域に対応した社会科学的なマクロ的視野と対人援助技術を有機的に結び付けることを重視した2つの体系的なカリキュラムのみならず、さらにより発展的な研究・実践の推進をめざし、心理・教育相談センター、人間科学研究所、各種研究プロジェクトと連携して、地域フィールドにおける研究や教学を展開しています。さらに、本研究科では対人援助現場で活躍する実践家を「社会人入学試験」「社会人入学試験(協定)」方式で受け入れ、また外国人留学生の受入、協定を締結している大学の院生や研究者交流プログラムを実施しています。

対人援助学領域における開講科目

〔必修〕		〔選択必修〕		
対人援助学演習Ⅰ	対人援助学研究法Ⅲ	人間形成学特論	組織行動援助研究	ソーシャルワーク研究
対人援助学演習Ⅱ	対人援助実習	臨床教育学研究	発達心理学研究	ケアリング研究
対人援助学演習Ⅲ	応用人間科学研究法	行動分析学特論	臨床心理学研究	臨床倫理研究
対人援助学研究法Ⅰ	対人援助学特別演習	精神保健福祉研究	障害学研究	司法臨床研究
対人援助学研究法Ⅱ		発達障害援助研究	障害児教育研究	対人関係援助技術研究
		家族療法・家族面接技法	福祉臨床学研究	比較人間科学研究
〔自由〕		コミュニティ援助研究	学校カウンセリング研究	比較文化臨床研究
大学院コース演習		生徒指導・進路指導研究	教授・学習学研究	インターンシップ
		教育評価・心理査定研究	応用人間科学特論	単位互換履修科目

臨床心理学領域における開講科目

〔必修〕		〔選択必修〕	
臨床心理学特論Ⅰ	臨床心理面接特論Ⅰ	臨床心理学演習Ⅰ	社会病理学特論 臨床心理地域援助特論Ⅰ
臨床心理学特論Ⅱ	臨床心理面接特論Ⅱ	臨床心理学演習Ⅱ	家族心理研究 臨床心理地域援助特論Ⅱ
臨床心理学基礎実習	臨床心理学特別演習	臨床心理学演習Ⅲ	精神医学研究 単位互換履修科目
臨床心理実習	応用人間科学基礎演習	心理学統計法研究	老年心理研究
臨床心理査定演習Ⅰ	応用人間科学基礎研究	発達心理学特論	学校臨床心理学研究
臨床心理査定演習Ⅱ		教育心理学特論	グループ・アプローチ研究
		認知心理学特論	心理療法特論
〔自由〕			
大学院コース演習			



対人援助学領域

対人援助学領域には、「人間形成・臨床教育クラスター」「障害・行動分析クラスター」「家族機能・社会臨床クラスター」「発達・福祉臨床クラスター」の4つのクラスターがおかれています。クラスターとは、チームティーチングによる総合的演習のことですが、既存の学問領域の垣根を越えたユニークなカテゴリーで分けられています。そこでは、院生ひとりひとりのテーマについてさまざまな角度から議論し、対人援助にかかわる理念から実践に至る包括的な理解を深めていきます。

対人援助学領域4つのクラスター

人間形成・臨床教育クラスター

「何のために生まれて、何をして生きるのか。答えられないなんて、そんなのは嫌だ」（やなせたかし『アンパンマンのマーチ』より）。現代社会が抱える諸問題について、解法マニュアルや処方箋を探すのではなく、人間形成や教育臨床の視点から根本的に問い直すこと、それが本クラスターの学びの姿勢です。年齢や職種、人生経験の異なる院生たちに専門性の異なる4人の教員も加わって繰り広げる真剣勝負の議論の中から、応用人間科学の新たな理論や実践が生まれることを期待しています。



障害・行動分析クラスター

障害・行動分析クラスターは行動分析学を中心とした対人援助の研究を行うクラスターです。対人援助学の基礎的なモデルである「援助、援護、教授」を行動分析学から継続的、発展的に検討しています。クラスターでの研究発表を対人援助の実践のひとつである、ととらえて、教員と院生が共同して研究を行っています。このクラスターではさまざまな研究テーマが新たな視点からとらえ直されています。過去の研究テーマをご参照ください。※



※修了生の修士論文テーマはホームページをご覧ください。

[トップページ](#) ▶ [受験生の方へ](#) ▶ [修士論文テーマ](#)

家族機能・社会臨床クラスター

人間形成の課題や関係性の諸問題を、対人関係、家族関係、社会関係の広がりにおいて把握することをめざします。臨床心理学、家族心理学、臨床社会学、トラウマ学、健康心理学等学問分野や方法は多様ですが、日常生活において生起する現象や出来事への関心をもとにして、①臨床と支援・援助の課題の社会性を解説する、②その関心の背後にある心理社会的なことを掘りさげていく、③物語的で省察的な記述の仕方を身につける、④学問的な表現で発信すること等を目指しています。



発達・福祉臨床クラスター

誕生から死をむかえるまでを視野に入れて、人間発達のプロセスの究明とそれに対応した発達援助や福祉のケアの諸問題や方法論を研究します。人間は、人生の節目の時期に「発達の危機」に直面します。それに対応した発達援助や福祉のケアの諸問題や方法論を研究します。特に、乳幼児期の子どもの発達とその支援、親子関係、児童期・青年期の人格発達とその支援、成人期・高齢期の心理的特徴や福祉のケアなどを人間発達の諸理論や援助方法論と関わらせて研究していきます。





それぞれの専門領域を持った3～4名の教員がゼミを担当します。院生の中には社会人経験を経て入学する人もおり、それぞれのフィールドでの経験を活かした学びを深めています。また、多くの臨床心理学領域の院生が対人援助学領域のクラスターにも参加し、ほかの領域を専門的に研究する教員や院生から研究に対して意見をもらうことで、より柔軟で、幅の広いアカデミック思考を身に着けています。ダブル領域と呼ばれるこの制度は本研究科固有のもので、臨床心理学に留まらない学びを可能にしてくれる魅力的な制度です。

授業では心理的な困難・障害問題に対するアセスメントや個人的・集団的支援・援助の実際に触れながら、臨床心理学の基本問題、技法、事例等を学びます。受動型の授業は少なく、ディスカッションやロールプレイングを中心として進める授業や院生が発表者となる能動型の授業が殆どです。このような院生主体の授業は緊張感があり、その分研究・実践活動に役立つ“活きた知識”を培える場であり、学んだことがそのまま自分の力になります。

ゼミでは各教員の指導のもと臨牀的なテーマ（病院臨床、教育臨床、文化・社会臨床など）の中から自分の関心領域を選び、研究を進めていきます。自分の構想や調べた論文を発表し、考えを深めていくような質問や意見を院生同士で交わし合い、研究を進めます。担当教員の専門分野に拘らず、自分が追求したいことを修士論文のテーマにできるのは臨床心理ゼミの特徴の一つです。修士論文の執筆を通して自分と向き合うことが重要視されているからです。

学外実習は、病院、学校・幼稚園、福祉施設などで行い、学内実習は、付属の心理・教育相談センターにおいて、個別のカウンセリングやプレイセラピーのほか、ソーシャルスキル・トレーニングなどのグループ活動を担当します。

修了生の多くは、病院の心理士、スクールカウンセラー、各種相談機関の相談員等、臨床心理士の資格を活かして活躍しています。

〔臨床心理士合格率〕

修了年度	2010	2011	2012	2013	2014
合格人数	12	11	10	9	9
合格率	100.0%	100.0%	90.9%	81.8%	81.8%

※合格率は修了人数から別進路の選択等を除いた人数で算出

臨床心理学領域

臨床心理学領域は臨床心理士養成大学院（第1種）としての認可を受けています。

さまざまな心理的な困難・障害問題に対するアセスメントや個人的・集団的支援・援助の実際に触れながら、臨床心理学の基本問題、技法、事例などについて、

各担当者の専門性（病院臨床、教育臨床、文化・社会臨床など）を活かして研究します。

日々の授業や、実習などを通し、さまざまな社会的課題に対して心理臨床の専門性をいかに活用・実践していくか、について教員、院生同士意見を交わします。

心理・教育相談センター

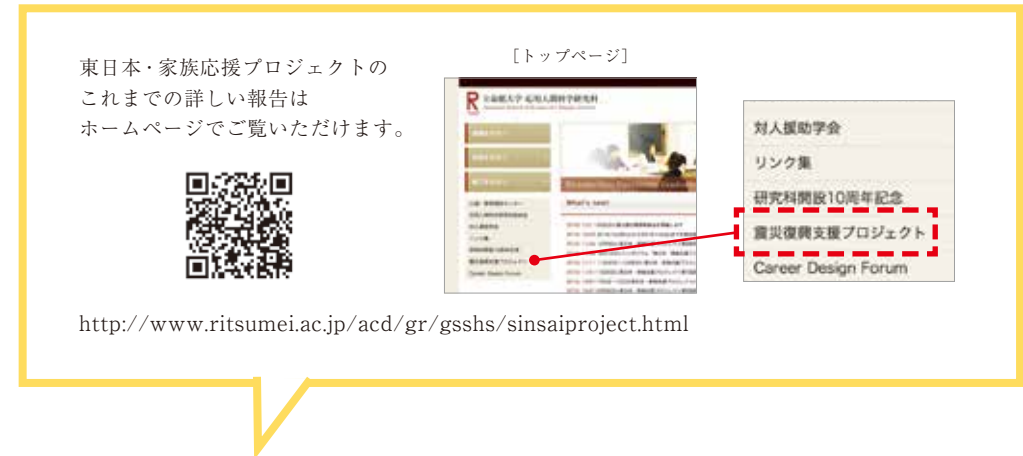
臨床心理学領域で学び、臨床心理士を目指す院生が、専門的訓練や学内実習を実施する施設です。臨床心理士資格をもつ教員を中心としたスタッフにより運営され、教員の指導のもとに院生・研修員がカウンセリングを担当しています。



連携と融合

領域を越えた対人援助の取り組み

応用人間科学研究科には、対人援助学領域と臨床心理学領域の2つが設置されていますがその領域を超えて多様な学びができるのも魅力のひとつです。教員の専門分野も多様で、異なる視点やアプローチを融合して、「東日本・家族応援プロジェクト」や自閉症スペクトラム児の発達援助プログラムなど、さまざまな研究プロジェクトや実践活動が展開されています。中には「対人援助実習」として単位認定を受けることができるものもあり、領域を問わず、多くの院生が積極的に参加しています。



01

1回生前期月曜日 6・7時限の必修科目

本研究科には学部からすぐに大学院へ進学する者、対人援助の現場での実践を理論化して研究成果としてまとめようとする者など、多様な経歴と目的意識を持った院生が在籍しています。そのため1回生前期には全員必修の科目を設け、2年間での学びを具体的にイメージできるよう、各クラスターやゼミでの研究内容や研究方法、研究リテラシーを学べるようにしています。また、本研究科で学んだことが現在のキャリアにどう活かされているのか、修了生から直接聞く機会も設けています。6月下旬に開催される2回生の修士論文構想発表会（ポスターセッション）に参加し、自らの研究テーマや方向性を見極め、1回生後期から所属するクラスターやゼミを7月に決定しています。



02

高大連携プロジェクト

このプロジェクトは、院生がピア・サポートの理念やスキルを学び、大学の付属校である立命館高校の選択科目において、学んだピア・サポートを授業のテーマに据え、それらを取り入れた授業を行っています。院生と付属校生の両者が、①ピア・サポートの手法を活用し実践すること、②生き方やあり方の変化のきっかけづくりの場とすること、③ピア・サポートを含め対人援助の具体的な実践活動の担い手となること、と定め、これらをもとに院生はピア・サポートの理念やスキルを「学ぶ」こと、高校生に「教える」ことを両立しながら取り組みを進めています。毎年、日本ピア・サポート学会の研究大会で報告し、取組課題の振り返りと更なる発展に向けての提言を行っています。



03

東日本・家族応援プロジェクト

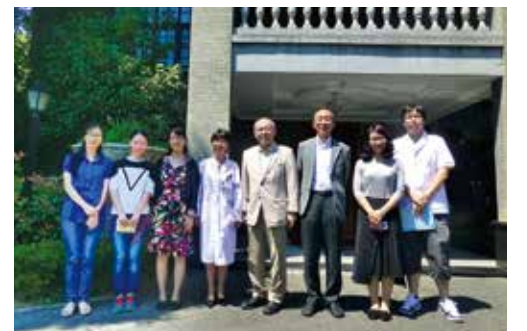
地震、津波、原発事故という三種類の複合大災害として甚大なる被害をもたらした東日本大震災を受け、「対人援助学の創造」を謳う本研究科では、2011年から十年間、毎年、東北4県（青森・岩手・宮城・福島）をキャラバンする「東日本・家族応援プロジェクト」を展開中です。現地の支援機関と協働しながら、現地に暮らす家族やコミュニティをエンパワーすること、今なお困難な状況に置かれている人々を支援している人を支援する等、対人援助的プログラムを提供しつつ、被災と復興の物語に耳を傾け、witness（証人）として存在し続けたいと思っています。「対人援助実習」の授業として、教員、院生と一緒に取り組んでいます。（臨床心理学領域の方も参加できます）。



04

海外での実習

本研究科では、海外の大学と協定を結び、海外での実習を行っています。夏休みは、中国・蘇州大学教育学院と連携のある病院等で実習を行います。病院では医師や看護師などの専門職に同行しての研修、企業では従業員・中間管理職に対するストレスマネジメントの研修の様子の見学、日本と中国の文化的相違も視点に入れた交流、意見交換などもあります。春休みはベトナム・国立ハノイ師範大学の附属施設である障害児教育訓練開発・訓練センター内のサオビエンセンターを拠点に実習や関連施設の訪問を行います。スタッフとは英語で交流します。また、発達検査や発達支援プログラムの作成、毎日の活動記録を英語で作成、実習最終日にはその成果発表を英語で行います。

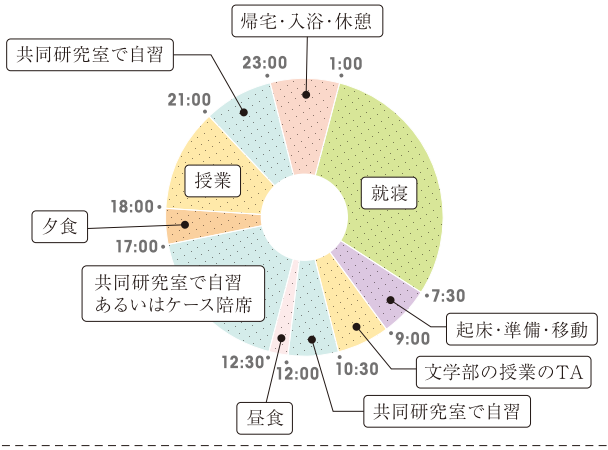




私は大学入学当時に発達障害児に対する支援を学びたいと考え、学部時代に行動分析学の視点から発達障害支援を勉強しました。しかし支援技術の習得だけでなく、本研究科の理念にもある「人を援助するとはどういうことか」について考えたいと思いました。そこで本研究科へ進学し、学びと実践を通じて、対人援助の視点から発達障害支援を実践することを目指しました。本研究科に入学してからは、日々の研究やケースなど、毎日が充実しています。時には予定をこなせない程に忙しかったり、研究が思うように進まなかったりして、つらく感じることもありました。その際は研究科の仲間と考えを出し合い、共に乗り越えることができました。また、研究科での学びの全てが、今の自分に必要な学びであり将来の糧になると考えると、つらくても楽しんで取り組むことができました。

修士課程1年目の終わりに当たる現在は、自分の研究分野に当たる理論や理解を整理したり、1年間行ったケースのまとめを行ったりしています。最後に対人援助の視点について、「対象児にどのような支援が必要なのか」「その支援を行うことで対象児とその家族がどのように変化していくのか」を日々の研究や実践の中で考えることを大事にして取り組んでいます。

ある1日のスケジュール



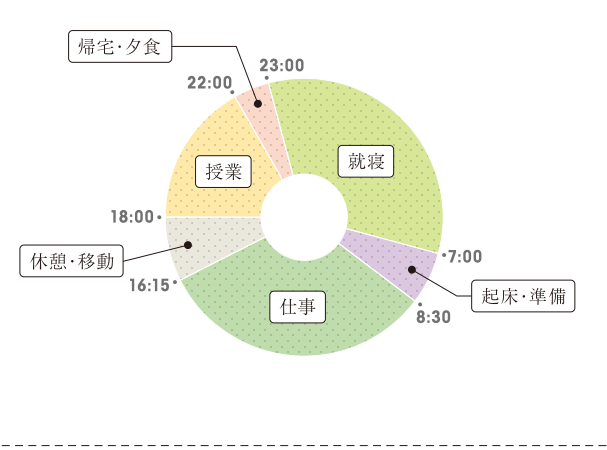
私は、児童相談所で働いています。児童相談所は、社会の影響を受けやすく、求められる役割が、年々変化しています。その変化に流されるままではなく、何か軸になるものを手に入れたいと考えるうちに、好きな先生がいるという理由もあって、この大学院に入学しようと思いました。

受験をするか悩まれている方の中に、仕事や家庭との両立が出来るのか不安に思う方がいるかもしれません。私自身、授業の時間割を知ったのは入学後でした。正直、時間のやりくりなど大変ですが、その分、毎日刺激たっぷりの生活です。とりえず入学さえしてしまえば、後は『なるようにしかならない』ということをおアドバイスします。楽しんでもの勝ちです。

適当な性格のため、「〇〇の研究がしたい!」というような明確な思いを持って入学をしたわけではありません。授業やクラスターを通じて、徐々に具体的に、面白味のあるテーマに近づいていると思いたい、そんな状況です。

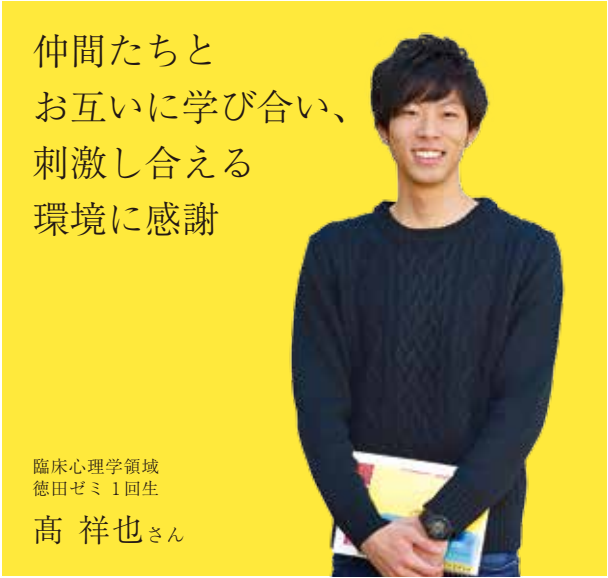
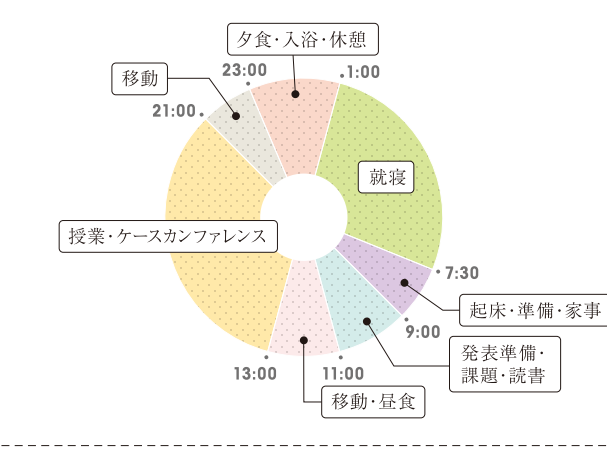
他の対人援助学領域の方にナマでお話が聞けることが魅力です。仕事では関係性もあって、本音が出せなくても、大学院の生活では、聞きたい放題・言いたい放題。ぶっちゃけ話をたくさん得られます。皆様の入学をお待ちしております。

ある1日のスケジュール



私は、公的機関の心理職として仕事をしてきました。仕事を通してさまざまな困難を抱えた児童やご家族と向き合う中で、自分のアプローチの幅の狭さを感じ、今一度基礎から理論を学び、調査研究をしながら、アセスメント技法、援助技法の幅を広げていきたいと考え、大学院進学を決めました。本研究科へは、社会人入試を経て、職場の長期休職制度を使って通学しています。この研究科の特徴は、臨床心理学領域であっても、臨床心理学に留まらないさまざまな研究領域に触れる機会に恵まれていることだと思います。私も、臨床のゼミだけでなく、家族機能・社会臨床クラスターに属しており、演習やグループワークの機会が多くあります。その中で、先生方から貴重な助言や厳しくも本質的な指摘を受けたり、院生同士意見交換したりすることで、新しい視点を見つけ、苦しくも楽しく研究を進めていくことができています。研究科には、学部卒業から直接進学してきた院生から年代多様な社会人院生、留学生がおり、それぞれのバックグラウンドを生かし、互いに刺激を受けながら研究活動をしています。研究科全体として、意欲のある院生を歓迎する雰囲気があり、院生が本当に興味のあることを自由に追求していける環境があると感じています。

ある1日のスケジュール

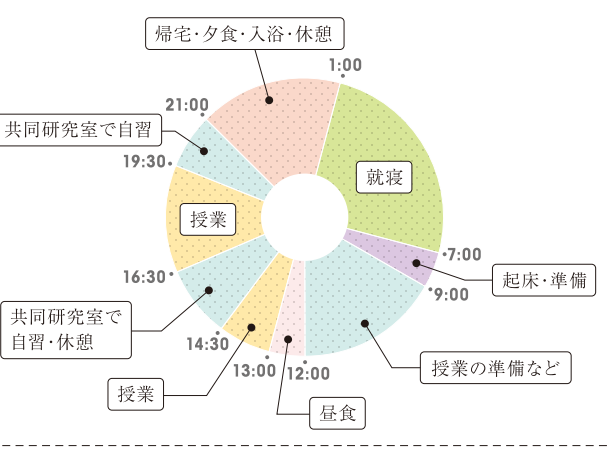


私が所属する臨床心理学領域では、臨床心理士の資格取得のための勉強や、臨床実践のトレーニングを行っています。知識や理論の学習はもちろん、カウンセリングのロールプレイ、心理検査の体験や学内外の実習を通して、臨床心理学やカウンセリングについて一から学んでいます。私は社会福祉学を主に学んできたため、大学院の授業についていけるか、が心配でした。しかし今では友人たちと励まし合って勉強し、先輩方に助言を頂いて、充実した学習環境に身を置いています。

私は臨床ゼミに加え、人間形成・臨床教育クラスターにも参加して、社会福祉施設で暮らす子どもたちの生活環境について研究しています。ゼミだけでなく、このクラスターにも参加することで、修士論文の進捗状況の発表準備の時間は増え、負担に感じることもあります。しかしその分、対人援助学領域の院生や先生方から、自分の専門分野とは異なった視点の意見をいただくことができ、それによって新たな気づきを得て、自分の研究について深く考えることのできる、とても有意義で貴重な時間です。

さまざまな問題意識を持つ仲間と、授業や研究に打ち込み、お互いに学び合い、さまざまな事柄に対して食欲にチャレンジできる環境に感謝しています。

ある1日のスケジュール



修了生からのメッセージ

臨床心理学領域

家族機能・社会臨床クラスター

希望と展望を かたちにする 教えと学び

立命館大学総合心理学部准教授
[2004年3月修了]

安田 裕子さん



大学卒業後就職した私は、対人援助に従事するうえでの「プランク」を思わずにはいられず焦る気持ちも強くありましたが、応用人間科学研究科での教えはそれを「経験」に変えていく機会を多様に与えてくれました。臨床心理士として対人援助職につく夢と期待感を胸に、将来展望に向かって志高く突き進んでいくことができたのは、学ぶことの楽しさや研究の面白さを存分に伝え、常に支え励まし続けてくれた、クラスターでの刺激的な関わりであり、恩師たちの情熱でした。誰しも、迷いが生じたり失敗や挫折に落ち込んだりすることがあるのではないのでしょうか。しかし人は、いつだってやり直していくことのできる存在です。過去を顧み現状を洞察し未来への希望と展望をもって、連携と融合に根差した知識や技術、粘り強く対人援助を構成していく人間力を、着実に身につけていくことができる場。応用人間科学研究科での教学は、新しい世界を切り拓いていく可能性に満ち満ちています。

発達・福祉臨床クラスター

心理検査を扱う者として 子どもを見る視点の 違いに気づいた

中国・蘇州工業園区仁愛学校 教員
[2012年3月修了]

唐 妍さん



私は現在中国の養護学校で勤務し、知的障がい児、自閉症の子どもたちをはじめ、地域の普通学級の子どもたちにも発達検査や知能検査など実践しています。今の仕事に就いたのは、本研究科の発達・福祉臨床クラスターでの勉強に大きく影響を受けています。大学院に入って、専門的な知識や発達に関する研究と、たくさんの実習も経験しました。日本だけでなく、中国そしてベトナムでの実習で感じた違いは、子どもへの発達検査や知能検査の読み方や解釈の違いです。中国では検査の結果を点数だけ取り上げ、子どもへの判定基準は「できる—できない」という二極化の傾向があります。しかし日本では、検査を通した点数以外に、検査項目へ取り組む過程や、下位項目の読み方も大事にしていました。このような捉え方など、実践を通して多くの事を学び、考えました。私はその時に学んだ事を仕事に生かし、専門性と経験を基に更なる研究へと繋げ、やり甲斐を見つける事ができました。

家族機能・社会臨床クラスター

自分のかける一言で どのように 相手の心を開くのか

NHK ディレクター
[2010年3月修了]

土井 亨さん



テレビ局のディレクターという職業には勝負の瞬間があります。それは「インタビュー」です。末期がんの父親を看取る家族、超低体重児を産んで自分を責める母親、戦争で妹を失った女性…。辛い心の内に寄り添い言葉をもらうとき、道しるべとなっているのがこの研究科で学んだ「聴き方」です。実は明確な目標を持たずに大学院に進学したせいで、当初はかなり手探り状態でした。そんな時、大きな転機となったのが、研究で行ったホームレスの聞き取りでした。当事者との信頼関係の築き方、人に打ち明けられない感情の引き出し方など、自分のかける言葉が相手の心の内に強く作用することを知り、その奥深さに魅了されました。路上では日々当事者と対話し、研究科では仲間たちと議論し、徹底的に「聴く力」を磨くことに費やしました。結果的に今の職種は対人援助と少し異なりますが、「相手との関わり合いが第一」という点は変わりません。ここでの実践的な学びが大きな力になっています。

家族機能・社会臨床クラスター

やりたいと 思っていたことを 実現できる研究科

公益財団法人 どうぶつ基金
[2015年3月修了]

小池 英梨子さん



応用研はいわゆる“研究”をしにいくところというよりも、自分が持っている「問題意識」に向き合い、取り組み力を身に着けることができる場所だと思います。小さい頃から猫と育ってきた私は、毎年沢山の犬や猫が殺処分されている現状に大きな問題意識を持っていました。応用研では特定の専門分野に関係なく、自分が持つ関心に真向から向き合うことができるので、私は2年間“猫”をポイントに共生と共存社会のリアリティについて実践と研究活動を行ってきました。授業は夜が主体なので、昼間は自分のフィールドで実践を行い、夜間の授業やクラスターで先生や仲間から意見やアイデアをもらい、また次の実践に生かす、という具合に実践と学びを両立させながら深めていくことができます。そして大学院での研究活動をきっかけに現在は、公益財団法人に勤務し、人と動物が共生共存できる社会をつくる仕事をしています。やりたいと思っていたことを実現できる研究科です。

DATA

修了者の進路・就職先

- 児童養護施設 児童指導員
- 福祉専門学校 専任教員
- 老人総合センター
- 社会福祉法人
- 出版社、テレビ局
- 大学実習助手
- 医療福祉専門学校 講師
- 介護サービス相談センター 専門相談員
- 児童福祉施設 専任教員

- 生涯学習センター 契約職員
- 重度知的障害者 授産更生施設支援職員
- 高等学校 専任教員
- 国立療養所
- 広域衛生管理組合 心理判定員
- 保健センター 心理判定員
- 医院
- 精神保健福祉総合センター

- 医科大学 助手教官
- 聴覚障害者センター
- 子ども家庭相談センター
- スクールカウンセラー
- 看護短期大学 助手
- 嘱託発達相談員
- 医療福祉専門学校 教員
- 公立看護大学 助手
- 児童厚生員
- 福祉専門学校 講師

- 介護法人 保健施設
- 新聞社 専門職
- 地方上級福祉職（専門職）
- 博物館 学芸員
- 大学教員、職員
- 立命館大学大学院 博士後期課程進学
- 専門職公務員（心理職）
- 私立中学校 心理相談員

社会人入学者勤務先

- 精神科診療所 心理士
- 保健所、公立幼稚園 相談員
- 私立幼稚園 園長
- 社会福祉法人 指導員
- 公立小学校 教員
- 公立養護学校 教諭
- 公立中学校 養護教員

- 公立専門学校 寄宿舎指導員
- スクールカウンセラー
- 財団法人 幹事
- 子ども支援センター 地域活動員
- 在宅介護支援センター 社会福祉士
- 精神障害者地域生活支援センター ワーカー

- 公共職業安定所 精神障害者担当職業相談員
- 町役場 福祉事務
- 児童相談所 職員
- 障害者授産施設 支援員
- 看護短期大学 教員
- 医療短期大学 教員

- 看護短期大学 精神看護学 講師
- 看護専門学校 教員
- 医療法人 看護師

FACILITY

究論館



これは大学院生専用の3階建ての研究棟です。本研究科は2階に共同研究室があります。ここでは院生ひとりひとりにキャレルと呼ばれる机があり、授業以外の時間帯で大学にいる場合はここで勉強をすることがほとんどです。対人領域、臨床領域、1回生、2回生がひとつの部屋にいることから、領域、回生を越えてワイワイガヤガヤ、研究の話やそれ以外のことを話す中で、新たな問題意識、興味関心が湧き、研究にさらに生かすことができます。

実験・実習相談室



本研究科の院生の授業・研究支援のためにある部屋です。臨床心理学領域の院生はもちろんのこと、対人援助学領域の院生も発達検査等を実施します。それらの検査機器の貸し出し、ポスターセッション用のポスター印刷のための大型印刷機、分析ソフトがインストールされているパソコン等、研究に必要な機器備品の貸し出し、実験実習費による補助の事務対応をします。またレポートや修論等、研究のあらゆる相談に対応し、アドバイスをするリサーチアドバイザーも在室しています。

[対人援助学領域]



荒木 穂積 教授
発達・福祉臨床クラスター

人間発達に大きな興味があります。近年は、発達診断チェックリストや自閉症スペクトラムの療育プログラムの開発に取り組んでいます。



尾上 明代 教授
家族機能・社会臨床クラスター

専門はドラマセラピーです。さまざまな「役」を演じることは、新たな世界の創造です。自分の再発見と他者理解を深めていきます。



齋藤 清二 教授
家族機能・社会臨床クラスター

専攻は医学(内科学)と臨床心理学です。ナラティブ(物語)とエビデンス(根拠)を共に活かす対人援助学を探索しています。



藤 信子 教授
障害・行動分析クラスター

個人の行動について、その内的な歴史からと社会的環境との相互作用からとの双方を、集団精神療法によって考えることもできます。



増田 梨花 教授
人間形成・臨床教育クラスター

絵本との出会いは、「人生」との出会いです。絵本の世界は無限の広がりや深みがあり、その魅力を伝える研究を楽しくやっています。



三田村 仰 准教授
障害・行動分析クラスター

専門は認知行動療法です。対人援助において科学性と実践性をどう統合していけるかを大きな研究テーマとしています。



竹内 謙彰 教授
発達・福祉臨床クラスター

子どもも大人も、たとえ発達障害があっても、人は発達を遂げていきます。発達する人への援助を共に学んでいきましょう。



谷 晋二 教授
障害・行動分析クラスター

行動分析学に基づいた対人援助の研究をしています。障がいのある子どもやその保護者への支援の実践的な研究を行っています。



団 士郎 教授
家族機能・社会臨床クラスター

全ての対人援助場面で家族理解は必須です。分かってこそ専門性も発揮できます。家族の構造的特徴から変化への一歩を学びます。



村本 邦子 教授
家族機能・社会臨床クラスター

臨床実践を通じて、ジェンダーとトラウマの視点から家族、コミュニティ、歴史の捉え直しをしてきました。一緒に学び未来を創りませんか。



吉 沅洪 教授
臨床心理学領域

専門は臨床心理学、文化心理学です。広い視点から文化とこころ、文化と心理療法、文化と災害後の心のケアなどに取り組んでいます。



徳田 完二 教授／研究科長
臨床心理学領域

主な研究テーマは、学生相談、イメージ技法、リラクゼーションです。ゼミ生は自分のやりたいテーマに取り組んでください。



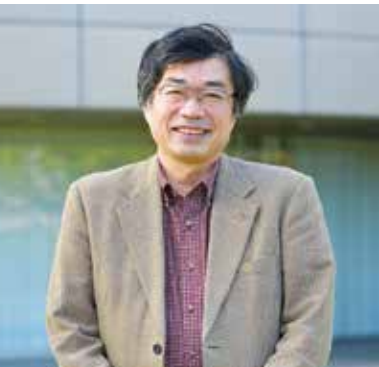
中村 正 教授
家族機能・社会臨床クラスター

臨床社会学、社会臨床、社会病理学が専門です。暴力、いじめ、ハラスメント、問題行動に関する臨床と支援をしています。



中村 隆一 教授
発達・福祉臨床クラスター

生涯にわたる発達を地域での支援の研究を人間発達という視点から取り組んでいます。



野田 正人 教授
人間形成・臨床教育クラスター

専門は、司法福祉、児童福祉、教育臨床で、子どもの非行や虐待についての学校や諸機関での支援の方法や制度を研究しています。



宮口 幸治 教授
臨床心理学領域

発達障害・知的障害をもった非行少年への教育プログラムの開発に携わってきました。学校教育等への応用を目指しています。



森岡 正芳 教授
臨床心理学領域

語る力は聴く力：人々は苦しみに対処する知恵を生活の中から創り出してきました。その知恵をともに掘り起こしましょう。

イベント情報や入試情報、授業紹介など、ホームページで最新情報を掲載しています。

